第５回多職種のための投稿論文書き方セミナー

質的研究論文の執筆でおさえておくべき点

木　下　康　仁（聖路加国際大学看護学研究科）

Ⅰ．は じ め に

質的研究の定義問題（木下，2020，第13章）として論じられているように，現状では質的研究についての共通理解が成立しているとはいえず，その成果を発表する論文としての位置づけも立場による違いがみられる。質的研究の内部では科学的認識論のレベルで実証主義からその批判に根拠をおくポスト実証主義，さらには反実証主義までの幅があり，個別の質的研究方法が並立している。また一方では，質的研究は厳密さに欠ける研究であるという見方があり，他方では，簡単でやさしい，取り組みやすい研究であるといった見方があり質的研究の理解を混乱させている。どちらも誤りである。

こうした状況を踏まえたうえで本稿では，質的研究論文執筆の際の考え方について述べていく。

Ⅱ．質的研究論文への「あるある」反応

質的研究論文への批判的な反応として，次の二点が挙げられる。一つめは，なぜその結果になったのか，どのように分析したかがわからない，恣意的に都合の良いデータだけを論文に引用しているのではないかといった疑問である。これは方法に関する疑問である。分析方法の明確化と分析プロセスの明示化の要請につながる。二つめは，なんとなく読めるが研究論文として見ると，それはそうかもしれないがこれで何が新たに明らかにできたのかという疑問である。これは内容に関する疑問で，平板ないしは冗長な記述と受け止められる。記述の論理的緻密さ，密度，説得力が求められている。

質的研究論文への「あるある」反応とは，方法に関する疑問と内容に関する疑問で，論文の根幹にかかわる点であるから，適切に評価されるためにはこの両方の課題への対応が求められる。しかし，質的研究では研究者による意味の解釈が分析となるが，分析方法として明確化されていない場合が少なくない。方法は明確でなくても深い洞察による論理的な内容の論文もある。ただ，多領域になると読めばわかるといった内容評価には無理があり，解釈といってもそれがどこまでデータに根拠をおいているのかを確認しないと評価できない。

質的研究はほとんどの場合，複雑で多様な現実の世界を生きている人間を対象とし，そこに問いを立てるので厳密な操作化にはなじまない。むしろ，本誌のように専門的研究者だけでなく臨床実践にかかわる多職種の専門職で構成される場には，実証主義的な研究による専門性に収れんした知と，人間の心理，意識，行動にトータルにアプローチする質的研究の知が加わることにより質的研究の一つの在り方を創出する可能性があると考えられる。

Ⅲ．方法と内容を分けて位置づけ，統合するという書き方

通常は，方法と内容は一体であり，一体でなければ研究自体が成立しないから，これは奇妙に思われるであろう。むろん，質的研究論文では両者がバラバラでよいということではなく，一体ではなく統合ということである。「研究者」の役割と位置づけが数量的研究とは異なるためである。

筆者が質的研究の定義問題として論じているように，質的研究とは総合的呼称で，定義は確立されてはいない。また，質的研究方法なるものが一つあるわけではなく，現状は個別性の強い質的研究方法が林立状

Presented by Medical*Online

態にある。各方法が独自の認識論を基礎にもっていることが定義問題につながっている。「認識論―方法論―方法」の関係が複雑に入り組んでいる。したがって，こうした状況で質的研究論文を書くには，限られたスペースの中で採用した方法について，執筆者の責任として説明しなければいけない。数字で表現されないデータを質的データとし，それを用いた研究が質的研究であるという説明は一見わかりやすいのだが，方法の多様化の問題があるから論文執筆では用をなさない。

質的研究法には大別しても，現象学的アプローチ，ナラティブ・アプローチ，ライフストーリー，エスノグラフィー，エスノメソドロジーなどのように，主に語りと観察から言語的データを得て意味の解釈を重視する系列があり，実証主義に批判的な立場である。もう一つは，グラウンデッドセオリーアプローチ，あるいはM-GTAなどのように意味の解釈を行うが，質的データに密着（grounded-on-data）し，継続的比較分析により理論的モデル生成までを目的とする系列であるが，このなかでも分化していて，実証主義に親和的立場から実践主義の幅がある。コード化，カテゴリー化などの分析方法がとられる。さらに，最近ではテキストマイニング系のようにソフトを使って質的データを分析するものも質的研究法に含まれ，こちらは実証主義に基づく。当然，結果の記述や表現もそれぞれに対応した形になってくる。

質的研究ではこれらのどれかを選択することになるが，執筆者がここに挙げた質的研究方法の全体を理解していることはまず考えられないし，全体を理解している査読者もまれであろう。採用した質的研究法に詳しい査読者が得られるかどうかも定かではないかもしれない。つまり，分析における研究者の役割と分析方法の関係の違いであり，第一系統では主要な方法論的考え方に基づき解釈は研究者に委ねられ，第二系統では研究者の役割とデータに密着した解釈をシステマティックに行う分析方法との組み合わせ，第三系統では研究者の直接的解釈は少なくデータ処理方法の比重が大きくなる。第一と第二の系統が質的研究の大半を占めているので，研究者の役割と方法の明確化の課題がある。なぜなら，査読者側が実証主義の人であればこれらの方法が「よくわからない」ということが起きやすい。

実証的研究では方法と内容は一体であるから，こうした反応になると内容の評価も困難になる。データの性質上，質的研究で画期的な結果が得られることはまず考えられないので，上記のような反応になりやすい。したがって，方法と内容をまず分けるというのは，個別論文で方法について理解が得やすいように明確に説明する必要があるということで，この点の重要さは執筆者には十分理解されていないと思われる。方法の説明が紋切型の傾向すらみられるのだが，短い説明であってもこれが内容の評価に直結するので注意する。

では，どのように統合すればよいのか。方法と内容を連結するのは，先に述べたように質的研究方法のタイプによって異なる面があるが，共通しているのは実際に作業をする「研究者の役割」である。この点の理解が重要で，質的研究では研究者が方法に組み込まれているからである。逆ではない。研究者が方法を使って研究するという考え方を反転させる。研究者は分析者であると同時に論文の執筆者であるから，方法と内容を反復的に振り返ることで統合化をはかる。これは分析プロセスの明示化を意味し内容の確からしさの評価につながる。

本節での議論を別な言い方でまとめると，「方法は問いに勝り，結論にも勝る」という立場と，「問いは方法に勝り，結論も方法に勝る」となろう。若干乱暴な表現だが，数量的研究であれ質的研究であれ，方法と内容の関係はバランスの問題であって，方法が知りたいことを常に保証するわけではなく，他方，方法をあいまいにして知りたいことが知れるということでもない。質的研究では研究者自身がデータや分析方法と深く関与するので，研究者の役割を意識化しないと，そもそも結果を自己評価できない。筆者はこれを「研究者の方法論化」として概念化している（木下，2020，特に第10章）。

Ⅳ．課題は「記述」の仕方：二つのジレンマ

質的研究論文は説明的な記述スタイルになるが，ジレンマが二つ挙げられる。第一に，一定の分量が必要であるが，学術論文には分量制限があるため十分な記述がむずかしい。その結果，質的研究では背景の社会的文脈を踏まえた深い解釈による「厚い記述（thick description）」が求められるのだが，この制限のため薄い記述になりやすいという課題である。せっかくデータの解釈をていねいに行っても，論文でそれがうまく表せない。

Presented by Medical*Online

多くの質的研究論文の投稿者が直面する課題であるが，この点についても発想を変えてみる。投稿規定の字数制限を嘆いても現実的な対処にはならない。例えば，どのくらい分量が与えられれば十分な記述ができるかを考えてみると，答えに窮するであろう。際限がなく書ければいい，自分で決めればよいという話ではない。質的研究論文の場合，字数制限に課題があることを否定するのではないが，現状ではそれを前提として厚い記述になるよう工夫するという考え方であり，その方が論文の密度の向上にもつながると考えられる。先に「あるある」反応で冗長な記述という受け止め方に言及したが，査読者そして読者にしても，学術研究誌の論文に求めるのは，質的研究であっても長く詳しい記述というよりも，コンパクトでインパクトのある内容であろう。

ではその方法は，となるので記述の仕方の問題に戻ることになる。重要性の強弱，抽象度の違いを理解しやすいメリハリのある記述にするには，いくつか具体的な方法が挙げられる。短い文章にすることで，意味を明確にできる。書く内容を事前にアウトライン（箇条書き）にまとめる。質的研究論文だからといって名文が求められているわけではなく，論理的な記述によって緻密さを確保する。筆者の経験では，これらは実は英語で書く場合と同じである。むろん，モノグラフのように単行本サイズが適している場合もあるが，研究論文の記述にも質的研究としての一つのスタイルがあってよい。

次に第二のジレンマであるが，こちらの方が悩ましい課題である。質的研究方法であっても，分析方法の明確化と実際の分析プロセスの明示化は必要である。前者はその方法の開発者や解説者の仕事であるが，後者は個々の研究者が説明することである。このとき，実際の分析プロセスと論文での結果の記述で，順序が逆になるという問題である。

例えばインタビューデータの分析では，データからコード化あるいは概念化という一次分析を行い，さらに継続的な比較により抽象度を上げたカテゴリーを生成し全体の結果に統合していく。この作業の流れをそのまま記述すれば分析プロセスの説明にはなるのだが，論文では結果の全体を最初に示し，その骨格となるカテゴリーを説明し，次いでカテゴリーを構成するコードや概念の説明という流れになる。

分析プロセスの説明は，分析が適切であったかどうかの判断材料になるので重要だが，結果との重複が起きる。査読者からすると，分析プロセスを読んで，続いて結果に進むと同じコード名やカテゴリー名が出てくるので「あれ？これはさっきと同じじゃないか」という印象をもちやすい。重複感はインパクトを希薄にする。

対応としては，分析プロセスの記述は最小限にする。分析方法の基本用語を使って説明し根拠とした文献を挙げる。そのうえで実際の分析の例を一つに絞り，データの解釈からの生成過程を示す。ところが，実際には「データを繰り返し何度も読んだ。類似性と差異性から比較を行った」など，作業を述べる場合が少なくない。これでは効率的な記述にならないので注意する。また，フィールドノートや M-GTA であれば分析ワークシートによる作業記録が残されるので，実際の分析プロセスの資料として投稿時に論文本体とは別に編集委員会に提示してもよいだろう。

Ⅴ．論理的緻密さと凝縮表現の効果的活用

質的研究は，人間を対象に，その人や重要な他者との相互作用に関する内容が特徴的で，複雑な現象に取り組むことになる。そのため，半構成的面接や詳細な観察調査から複雑で多様な具体的内容がデータとして収集される。そして，分析ではその複雑さを理解可能な形で明らかにしなくてはならない。

ここでは，複雑な分析結果はシンプルにも示すことができるという考え方を提案したい。シンプルとは要約的ということではなく凝縮した表現方法の活用で，具体的には表や図を指す。作図は視覚的に解釈するわけで，欠落がないかどうかのチェックにもなる。コードやカテゴリーの結果を一覧表にすることも効率的である。これにより記述部分では何を重点的に扱うかを判断しやすい。結果のすべてを記述する必要はなく，先述のアウトラインの作業を活用する。

Ⅵ．質的データの特性の活かし方

質的データの特性の活用の仕方も質的研究論文ではポイントとなる。データの一部分を引用する方法のことで，一見簡単そうに見えるが，ここでの工夫で論文の完成度が変わってくる。質的研究論文では，ほぼ例外なくデータからの語りの部分である。

質的データの特性については先述したが，質的研究の定義問題と直結するので少し詳しい議論が必要にな

Presented by Medical*Online

る。一般的に，質的データは数字で表現されていないデータと理解されているが，これでは質的データの特性が伝わらない。複雑で多様な人間の経験をディテール豊かに表現されたものとしての質的データは，数字で表現され，その時点ですでに現実が抽象化されたデータとは性質が異なり，語り手のいきいきとした経験的世界が具体的に表現されたものである。したがって，具体的な内容の一端を直接引用することで，分析結果と照らし合わせて理解を深めることができる。同時に，抽象化のもとになったのがどのようなデータであるのかを示す意味もある。分析結果だけではリアリティ感を伝えきれないからでもある。

データからの引用では，次の三点に気をつける。短過ぎないこと，長過ぎないこと，そして，多過ぎず・少な過ぎず，である。短過ぎないとは，意味のまとまりには最低限の文脈性が必要ということであり，長過ぎるかどうかの判断では，実際の長さというよりも複数の文脈が混入しないようにする。データからの引用部分は，目的と効果を考慮し慎重に選択する。多過ぎず・少な過ぎずとも関係するが，引用の仕方で失敗すると，冗長さを感じさせ逆効果になるのでこの点にも注意する。

Ⅶ．分析結果の記述の注意点と考察の記述の仕方

質的研究論文では，結果の記述が淡々と進み，単調な印象を与えかねない。カテゴリーなどについて「何々は何々である」式のワンパターンの説明になると，単調さから内容が平板なものに思えてくる。分析が不十分な場合もあるが，ここでは分析は十分できていたとしても記述の仕方によって適切な理解と評価につながらないことで，分析とその記述は別の作業と考える。

部分と全体の構成関係を明確にし，どの部分が全体の中のどこに位置しているかが明確でないと読みにくく，読むのが負担になりやすい。先に図表を活用した凝縮表現の重要性を指摘したが，結果の記述では最初に全体を説明し，順に抽象度が高いものからその構成要素となるものへと進める。

ところが，実際に起きているのは，修士論文や博士論文のように十分な分量が与えられるときの結果の記述が，投稿論文で横滑りしている場合である。全部は無理なので短縮はしているが，研究論文としての構成に工夫がないと単調で平板な印象につながる。構成をはっきりさせ強弱のポイントを確認することで，安易な短縮は危険を伴う。

次に，考察の書き方であるが，質的研究論文では結果と考察には役割分担があるといえる。結果については今述べたが，考察にも記述に工夫が必要で，問題はここでも内容に重複が起きやすいことである。考察は結果を踏まえて論じられるのでこれは当然と言えば当然なのだが，数量的研究では結果と考察は明確に分けられるが，質的研究はどちらも記述となるためその切り分けでわかりにくいためで，分析プロセスと結果の間で重複が起きやすいだけでなく，結果と考察でも同じことになりかねない。

結果の記述で部分と全体の関係の明確化に言及したが，考察でもっとも重要な作業は自分の分析結果全体について，その意義を含めて先行研究，関連研究を取り上げながら論ずることである。考察が十分書けているかどうかは，この一点を確認する。そのとき，数量的方法による研究例を含めた考察ができればさらによいので文献検索で意識的に探す。この作業を抜きに，カテゴリーなど主要な構成部分についてほかの研究結果と比較しても部分についての議論であるから，論点も拡散しやすい。

Ⅷ．限定，限界・今後の課題，の書き方

これらの項目も，研究論文では定番なものに思われがちだが，質的研究論文では厳密化，緻密化と関係する重要な意味をもっている。まず限定であるが，調査協力者のサンプリングと関係し，質的研究であっても得られた結果の一般化可能性の議論の枠組みにつながる。いわゆる機縁法（スノーボール・サンプリング）が使われる場合が多いが，便法ではないので選択理由を明示する。選定と除外の基準を設定することで，研究としての守備範囲を確定し，ここでの限定が結果の一般化可能性につながる。水を漏らさない厳密さが必要で，そのくらいに考えないと質的データはコントロールがむずかしい。

次に，研究の限界と今後の課題についての記述の仕方であるが，ここにも大きな課題がある。実際の記述を見るとヒヤヒヤするというか，論文の運命を左右しかねない危うさを感じることがあるのだが，執筆者はおそらく気づいていない。論文の最後になって，割引過ぎ，自己減点し過ぎて自分の研究を台無しにしかねない場合がみられる。代表的な例は，サンプル数が少ないので結果は一般化できないので，サンプル数を増

Presented by Medical*Online

やした研究が必要であるといった記述である。といって，具体的に考えられているようには思えない。自縄自縛というか，数量的研究のロジックを自ら持ち出し陥穽に陥ることは避けなくてはならない。

限界とは，方法と内容からわかったことをより確かな知見にしていくための課題で記述されるべきところで，減点ではなくポジティブな作業である。何かがわかればさらに新たな問いが得られるので，それを今後の課題として自ら提案する。

Ⅸ．実践への示唆，の書き方

この項目も当然視されているためか，なおざりな記述が目につくが，質的研究論文ではこの書き方に大きな意味がある。研究結果の実践的活用が重要だからというだけでなく，ここでの記述が分析結果の評価に関係するということである。研究者が行う質的データの意味の解釈は，正誤判断ではなく論理的緻密さと説明力が問われるのだが，評価のむずかしさがあり質的研究の特性を踏まえた評価基準が求められる（木下，2020，第12章）。分析結果を実践にどのように活用できるかをできるだけ具体的に示すことは，単なる示唆のレベルとは根本的に異なる作業である。応用しやすい形での提示により，臨床に詳しい人はその内容から適切さを評価できる。学会の場合にはこの条件は期待でき，この項目を論文の評価に積極的に組み込むことも可能である。

分析結果「を」記述するのに対して，分析結果「で」記述するということである。

Ⅹ．最後の決め手はやはりこれ…推敲

ここでの推敲は，一般的な意味というよりも，質的研究論文の執筆に不可欠の「方法」としてである。いくつかの観点から述べてきたように，読む側に理解できるように表現されていないのであればまだ作業が完了していないので，推敲とは最後の分析方法といってもよい。投稿して手を離れてそこで一区切りになり，次に取り掛かるのは査読のコメントを受けての修正のときである。

方法としての推敲は，最初から最後まで通して複数回読む。そのうち，１，２回は声を出して読む。研究論文であるからたいして時間はかからない。ただ読めばよいのではなく，この作業には書く側から読む側に自分の視点を切り替える意味があり，読みにくい箇所，つながりがわかりにくい箇所などに気づくことができる。論理的記述には短い文章にするとよいと先に指摘したが，短過ぎてギクシャクしていればこの段階で調整して滑らかな表現にする。

文　献

・木下康仁　定本 M-GTA：実践の理論化をめざす質的研究方法論．東京：医学書院，2020.

Presented by Medical*Online